『トルコ紀行一飛んでイスタンブール』

"世界遺産カッパドギア・パムッカレとトルコ周遊8日間"

[新日本トラベル: JT8]

出発 平成 10 年 12 月 27 日 (日) 添 乗 員: 望月有子さん

帰国 平成 11 年 1月 3日 (日) 現地ガイド: Irfan Ozturk

平成 10 年

12月27日(日)

朝7時50分少し前に出発し日暮里からスカイライナーで成田空港へ。電車の時間の都合で予定の集合時間より1時間近くも早く到着したため、間違えて異なるツアー(新日本トラベルの添乗員なしのところ)に並んでいたら、すぐ前の60代くらいのおばさんが1人でインドツアーに参加するというので、勇気があるなぁ、と感心してしまった。今回、僕は初めてのツアー1人参加で、少し心細くて緊張していたのだ。

9時 50 分に手続きが開始したが、小学生の男の子を連れた同年代の 2 人連れが前にいて、僕も息子を連れてきても良かったなぁと思った。その後 10 時 50 分頃まで、円を US ドルに両替したり "るるぶ" や喉スプレーを購入したりして過ごした。

出発を前に家に電話すると、数ヶ月前より入院していた伯父が今朝の3時40 分頃逝去されたということであった。お袋から、今から戻っても仕方無いし、 何とかするからと言われ、確かに全く仕方が無いので、ツアーにそのまま参加 することにした。

11 時 50 分、トルコ航空の機体の JL459 便は離陸した。銀座にある新日本トラベルに旅行代金を支払いに行った際、この便は JL だが機体はトルコ航空と聞いていたので驚かなかったが、内部のビデオや音楽などが貧弱であった。

座席(29K)は窓側で、もちろん禁煙席であり、隣りは通産省のお役人をしているという石塚君で、浮間の独身寮に住んでいるということから、いろいろ話が弾んだ。彼は25歳と若いくせに、インドやエジプト、さらにはキリマンジャロに登ったことがあるという行動派で、海外旅行について強烈なインパクトを与えてくれた。初め、自分とそれほど歳が違わないかなぁ、と思って敬語で話し始めたけど、25歳じゃねぇ!

機内ではあまり眠れず、かといってビデオを観ていた訳でもなかった。伯父が西方浄土に逝った日に、自分は西の方に向かっているんだなぁ、などとしみじみと思い、幼い頃からとても可愛がってくれた伯父の思い出に浸った。

現地時間の4時43分頃、黒海上空を通過するのが確認できたが、波が見えな

くて穏やかだが Black sea の名の如く不気味な感じがした。周囲に家並みはなく、 超巨大な湖といった感じであった。黒海の向こうはブルガリアなんだよね。

12 時間少しの長いフライトを経て、イスタンブールに到着した。入国審査時に外国人観光客が多いのに驚いたが、石塚君によるとヨーロッパは今トルコブームなので、その影響ということであった。通産省のお役人が言うのだから真実味があるよね。

空港内でトルコリラに両替したが、物凄いインフレということだけあり額が 異常であった。現地ガイドのイルファンの説明では、トルコリラの0を3つは ずして、その半分弱が日本円ということであった。例えば、5百万トリコリラな ら2千円弱だって・・・。

フライトの疲れでお金の話以外は耳に入らず、ガイドの名前もイファンと記憶してしまった。バスがイスタンブールの街中に入ったところで、ヴァレンス水道橋と、ラマダン(断食)の期間中はモスク(ジャミイ)がより美しくライトアップされるという説明を聞いた。

ミム・ホテルはちょっと落着かない感じであったが、すぐに眠ってしまった。 暖房が入っていなくて寒かったせいで夜中に目が覚め、暖房のスイッチを入れ て再び休んだが、今度は暖房の音がうるさく、安眠できなかった。

12月28日(月) 晴れ

6 時 45 分にモーニングコール。7 時からの朝食となった。パン、チャイ、バター、チーズ数種、オリーブ(黒と緑)、ジャム数種、ハチミツといったものがトルコの朝食の定番で"カーバルトゥ"と呼ばれるそうだが、僕はコーンフレークが気に入った。

秋葉さんは昨夜このホテルの周りを少し探索し、少し歩いたところにあった 小さな店で、なにやら食べ物を買って来たという。疲れ知らずなんだなぁ。

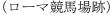
イルファンから"グナイドゥン、ナッスンスヌス"と声をかけられたが、全く反応できず言葉を返せなかったが、ホテルのロビーに飾られたクリスマスツリーについて、イスラムの国でもキリストの誕生日を祝うのか?と尋ねたところ、観光客用の装飾という答えであった。その後も、イズミールやパムッカレのホテルにも、ギンギラギンのツリーを目にした。

いよいよ観光の始まりである。まずはローマ競馬場跡に向かった。イルファンからイスタンブールは7つの丘から成っていて、そのために坂が多いと最初に説明を受けたが、まさに、坂、坂、坂で、あまり広くない道路には車、車、車・・・・。

ローマ競馬場跡は広場といった感じで、3つの記念碑(オベリスク)が立っていた。その一つテオドシウスのオベリスクはエジプトから運ばれてきたとい

うことで、模様だか文字だか分からないレリーフが刻まれていた。次に蛇のオベリスク、コンスタンティノープルのオベリスクと見学したが、朝早いせいもあり寒くて仕方がなかった。







(朝靄に霞むブルー・モスク)

そこから数分歩いてブルー・モスク(スルタン・アフメット・ジャミイ)に 到着した。入り口の脇には手洗い場があり、イスラムの礼拝の前に目・口・鼻・ 手足等を洗い清めるということであった。靴をビニール袋の中に納めて中に入 っていった。敷き詰められた絨毯の模様は聖都であるメッカに向いており、お 祈りもメッカに向かうように造られているという。イルファンからイスラムの お祈りの仕方の説明があったが、頭を床につけたり、首のマッサージがあった り、将にストレッチだと思った。歳をとっても元気でないとこのようなお祈り はできないし、お祈り前のお清めは衛生的だし、それも1日5回もお祈りをす るなんて、宗教が医学・衛生学と結びついて人々の信仰の対象になったことが 伺われた。



(ブルー・モスクの内部)



(トプカプ宮殿)

その後、バスでトプカプ宮殿に移動した。この入り口の門はバスがギリギリ 通れるような狭さであったが、みな上手く通過していた。少し靄がかかってい たが天気は良好で、トプカプ宮殿に向かう道のりはとても気持ち良かった。バ ービュスセラー門の辺りには本物の銃を持った兵士がおり、さすが宮殿という 感じであったが、日本でも皇居の周囲は皇軍警察がいるなぁなどと考えてしまった。また、この辺りにいる鳩は栄養がいいのか、とても太っていた。

はじめに陶磁器の展示を見学したが、結構数が多くてザーっと見た感じであったが、シルクロードを通って中国から運ばれてきたのかと思うと、その労苦が偲ばれた。そして宝物殿では煌びやかな玉座やエメラルドをふんだんに埋め込んだ剣や、有名な『匙職人のダイヤモンド』等を見学した。監視員がいるくらいだから、これらは本物かもしれないけれど、でもこんなに見物人の多いところに本物を置いとくかなぁ? 本物は国営金庫の中なのでは・・・などと考えてしまった。イルファンだか望月さんだか忘れたけど、ここの宝物を売ればトルコは一気にリッチになるって話していた。

宮殿の一番奥にある展望台のような所からは、金角湾が美しく見下ろせ、形のよいスレイマニエ・ジャミイが際立って見えた。観光後バスに戻る際に、物売りが多く寄ってきて、3個1000円を4個に値切ってトルコ帽子を購入した。1個250円の割りには結構いいね。

街中ではモハメッドさんとかアントニオさんとかいう感じの人々をたくさん見かけた。"モハメッド!"とか叫べば5~6人は振り返ってきそうな雰囲気であった。力道山がいて、まだ馬場が若かったころヨセフ・トルコというレフリーがいたが、あの人はトルコ人なのかなぁ。イルファンに聞きそびれてしまったが、どうせ分からないだろうなぁ。

その後グランド・バザールを訪れた。ヌルオスマニエ門から入って、石塚君とともに活気ある店々を見て廻った。結構上手い日本語で話しかけてくる奴もいてビックリしたが、それだけ日本人観光客が多いのだろう。思ったよりも広くはなく、中学の修学旅行で行った新京極通りの方が強烈な印象だったように思われた。オールド・バザールのところまで行き、少し買い物もした。自由時間も少なく大した買い物はできなかったが、娘のおみやげにするトルコ石とガラスの指輪を購入した。時間があればもっと値切れたのだが、チャイを出されてしまって契約成立。結局 2 割引くらいにしかならなかった。途中すれ違った西さんと野津さんにはベリーダンスの衣装を指差して"あんなの自分のお土産にいいんじゃないの"と声をかけた。

その後、石塚君は両替に出かけ集合時間に遅れて戻ってきたが、ベルサーチのシャツを値切ってきたのだった。皆で、それは偽物の可能性が高いとからかった。彼を待っている間、ドネル・ケバブの焼けるいい香りが漂ってきて、お腹が空いていることに気づいた。

昼食はシーフード料理ということで、数々の地元料理が出てきた。えんどう 豆の冷製、カタクチイワシの冷製、シーバスの蒸し煮、羊肉の串焼、ポテトサ ラダ、魚介類のオーブン…。この店では関西空港から出発した同社のツアーグ ループと落ち合う筈であったが、間違えてスーツケースがヒースロー空港に行ってしまった人がいるとのことで、バスで空港に取りに戻ったために関空組は遅れていた。

食後はマルマラ海を左に見ながら高速道路を西に向かった。30~40分位眠ってしまったが、眼を覚ますと丘陵地帯が続いてのどかな雰囲気であった。その後 1 時間ほどは天気も良くて暖かそうであったのだが、突然霧につつまれ、それを抜けると一面の銀世界であった。信じられないような雪景色には心底驚かされた。こんな天候で、予定通りに今夜の宿に辿り着けるのだろうかと心配になってしまった。

このまままっすぐ進むとギリシアとの国境になるという所を左折し、バスはスピードを上げて予定していた場所とは違う港からダーダネル海峡を渡ることになった。ドライバーとイルファンの機転により、港は違っても何とか18時のフェリーに間に合った(フェリーは1時間に1本とのこと)。

海峡を渡ると、大きな魚の加工・缶詰工場が目についた。何とか 19 時前には チャナッカレの宿に到着できた。夕食時にトルコのお酒ラクを飲んでみたが、 これはちょっと、という味で・・・。その後 2 度と口にすることは無かった。

仕事や忘年会の疲れで胃の調子が悪く、12月の中頃から久々にガスターの世話になっていたため、旅行中のアルコールは少し控えめにした。一応、トルコのビール・ワインそしてラクは押さえたが、その中でビールは結構美味かった。2種類の銘柄があったようだが、どちらもトルコの少し脂っこい料理に合っていた。ワインは主に白を飲んだが、イズミールの方がブドウの産地ということから、そこそこの味わいであった。問題はラクだ。ワインの搾りかすを蒸留してアニスで香りをつけた焼酎だそうだが、はっきり言ってまずかった!

12月29日(火) 晴れ

朝7時にホテルを出発し、一路トロイに向かった。新田さん(住職?)とともにバスの最後方に座ったが、すきま風が寒くて参ってしまった。トロイの遺跡には本日の1番乗りとなった。事前の写真で見ていた復元された木馬は、遊園地にでもあるような、遺跡とはちょっと場違いな感じのものであった。でもこれは、ホメロスの伝説を基に忠実に再現され、ギリシア神話にも登場するイダ山の松の木から造られたという。それにしても、その大きさの木馬の中に50人(だっけ?)もの兵士が入り込めたものだと思った。ギュウギュウ詰めで押し込まれたか、実際にはもう少し大きかったのではないかと思われた。木馬の内部に入って写真撮影を済ませてから遺跡見学がスタートしたが、朝早いこともあってとっても寒かった。この後に新田さんや高橋さんらが体調を崩されたが、このときの寒さが大きな原因であったろうと思われた。







(再現されたトロイの木馬と遺跡群、イルファンの説明にちょっと緊張気味)

イルファンは多くの財宝を持ち去ってしまったシュリーマンのことを良く言っていなかった。財宝は数年前にロシアで発見されたが、是非トルコに返還して欲しいと切実に語っていた。遺跡は現在も本格的に発掘調査されており、9つの時代の都市遺跡が確認されているという。また、遥か昔には、この辺りまで海が迫っていたというが、現在では周囲に何も無い中に、ただ石積みだけがむなしく残っているという感じで、兵どもが夢のあと、といったところかな。

あまりに冷えてしまったので、新田さんとともにバスの席を前方に移動した。 遺跡の近くでは、ドイツをはじめとするヨーロッパの観光客に媚びてか、シュ リーマンの名前やドイツの国旗の掲げられたみやげ店も見られた。また、トロ イの遺跡のトイレは、小便器の位置が高くて、爪先立って用を足しました!

トロイを後にして山を下り、バスはペルガモンを目指して進んだが、だんだん暖かくなっていき、休憩したドライブインではコートも脱げるくらいになってきた。ここで石塚君がトルコの国旗のネックレスを購入したので、付き合って僕も買ってしまった。驚くほど安かった。その後彼は、トルコの国旗に75と入った(共和国建国75周年にあたる)ブローチやらバッジに固執し、最後の空港でやっとゲットできるのであった。このドライブインではイルファンお薦めのオレンジジュースが美味しいそうだ(僕は飲まなかった)。

右手にエーゲ海を見ながらバスは進んだが、イルファンから、この海は少し行くとギリシアになり、すぐそこに見えるレスボス島にはレズビアンの語源になった修道院があるという話があった。こんなところが源になって広まったなんて不思議な気がしたが、それにしても愛の形っていうのは古代からいろいろあって複雑なんだなぁ・・・。

途中、折々、オリーブの木の下に布を敷いて実を落として、それを拾っている人や、頭に布を巻いてキノコや木の実を拾っている人たちを車窓から見ることができた。童話に出てくるような、昔のヨーロッパの田舎の風景といった感じがした。羊の放牧も多く見られたエーゲ海沿岸地域は、温暖でのどかであった。

ペルガモンの遺跡へ向かう途中、スーパーか何かの開店セール軍楽隊の演奏

をやっていた。日本でいったら大規模なチンドン屋さんてところだろうが、結構迫力があり、年末で学校が休みなのか、子供たちがたくさん集まっていた。

ペルガモンは本当に田舎町といった感じで、牧歌的な丘陵地にひっそりと佇んでいるといった感じである。狭い道を上っていきアクロポリスに辿り着いた。標高 333mの丘の上に広がるアクロポリスでは劇場に圧倒された。かなり急で(思わず昔の川崎球場みたい!と叫んでしまった)、古代劇場のなかで最も傾斜がキツイという。丘の南西斜面に形成され 1 万 5 千人が収容できたというが、後方の景色も美しく、自然を最大限に利用した構造に驚かされた。このような半円形の劇場はヘレン式で、後方は自然の風景を利用するという説明がイルファンからあった。







(軍楽隊を模した賑やかな 'チンドン屋さん'とペルガモンーアクロポリスの遺跡群)







(丘の上にある遺跡からはベルガマ市街が見わたせる)

トラヤヌス神殿・アテナ神殿等で何枚か写真を撮り、裏手の井戸ではコイン投げをした。真ん中の石の上にコインが乗ると願いが叶うと言うが、野津さんや西さんたちが乗らないと言って騒いでいた。僕は一発で乗せることができたけれども、願い事を言うのを忘れてしまった。きっと、この無欲なのが成功した原因か!?。

続いてアスクレピオンを見学した。ここはトルコの軍事施設の中にあるので、数人の兵士の姿を目にした。イルファンによるとトルコの軍隊はヨーロッパで一番兵隊の数が多くて約50万人にもなり、兵役の義務もきついとのことである。 実際、彼も戦車部隊に配属され、東アナトリアの方で何年か過ごしたが、マイナス数10度の中を走らされた苦い経験談も語ってくれた。

アスクレピオンとはローマ時代の医療施設跡である。少し歩いたところで、

山本さん (内科医) がヘビのレリーフに着目してガレノスのことを話し出した。 ガレノスと言えば生理学の祖と呼ばれる医聖のひとりである。そんな教養課程 時代の知識が頭をよぎった。ガレノスもここで治療に当たっていたという。ここの見学の頃はとても疲れてしまい、早くホテルに着いて休みたかった。ここにある 80mくらいのトンネル (地下道) をゆっくり歩き、医師が天井の穴からささやいて暗示療法を行ったそうだが、僕にもやって欲しかった。ここでの治療は薬草や温浴、マッサージ、運動、神への祈りが主で、ここで治らない患者は、さらにパムッカルの温泉で治療されたそうだ。







(ヘビのレリーフは、脱皮する蛇のように病から抜け出られるようにという意味)

3,500 人収容のローマ劇場では地元の子供が歌を歌ってくれたので、皆でお菓子や小銭をお駄賃とした。

この日の昼食後にトルコ石の店に連れて行かれた。日本語の上手なトルコ美人が丁寧に対応してくれたので、何となくネックレス等を買ってしまった。青い石がトルコ産の本物のトルコ石で、水色のはペルシア産出で価値が低いとのことであったが、水色の方がきれいに見えた。一つは小学生の娘に、そして一つは彼女に、と言ったら、彼女用にはきれいなリボンをかけてくれた。こんなジョークも通じるなんて、日本人ツアーは頑張ってるんだなぁ!

イズミールに向かう途中、ツアーのメンバーの自己紹介があった。新田さんは初め土木関係者と言っていたが、住職というのでビックリしてしまった。あのスキンヘッドは住職なんだ!このあたりまで新田さんは元気だった。あとは内科医が2名いて、野津さんが医者・歯医者・住職がいれば非常に安心です、と話していた。"ハーレムに勤めてます"と話した女子高の教師や、公務員、関西や出雲出身の人など、様々であった。

イズミールのホテル・アクサンはきれいで、窓も二重になっていて、今回の 旅行では一番良かった。疲れていたので、睡眠薬を飲んで早めに休んだ。

12月30日(水) 晴れ

朝、新田さんと高橋さんの具合いが悪いということであったが、疲れと寒さにやられたようである。イルファンに頼んでマスクを買ってきてもらい、バス

の中ではぬれマスクをやるよう説明した。また、今回持参した PL 顆粒や抗生剤 (バナン) 等を彼らに謹呈した。

本日の観光は、まずエフェス博物館から始まった。ギリシア、ローマ、ビザンツ時代の多くの出土品が展示されていたが、最後に陳列されていた『アルテミス像』は印象的であった。鎌倉の長谷観音に似ているような感じがしたが、同じ人間が造るものだし、このような像は見方によっては同じように見えるのかもしれない。

続いて少し山を登って『聖母マリアの家』を訪れた。イエスが磔にされた後、弟子のヨハネとともにマリア様がこの地に逃げ延びて余生を送った処とされている。閑寂な山の中にあり、内には聖母マリアの像が安置されているだけの小さな石造りの小屋で、地震で崩壊してしまったため、大部分が後に建造されたそうである。おしゃべりをしながらマリアの家に入ると、中にいた人から"しーッ"と言われてしまった。そんな煩悩をお払いするため、ろうそくを1本購入してお祈りをしてきた!? ここは外国人観光客が多く、キリスト教信者のお参りスポットになっているようであった。





(煩悩が振り払えますように!)

バスの駐車場近くにはおみやげ店がたくさんあり、聖母マリアの像を買おうと交渉したが、思いの外高かったのでやめにした。

いよいよエフェソス年遺跡の観光である。かのクレオパトラがアントニウス とともに歩いたという古代遺跡である。保存状態もよく、歩いているうちに歴 史の世界に引き込まれていくような感じになった。





天候もおだやかで、絶好の観光日和でもあった。まず、アゴラ(市場)とオ デオンそしてアルテミス像が出土したプリタネイオン、そしてニケのレリーフ 等を巡った。ニケとはナイキの由来になった勝利の女神である。『バック・トゥ・ ザ・フューチャーⅢ』でビフの祖先がマーティーの履いていた'nike'のスニ ーカーを 'ニケ'と読んでバカにしたのを思い出した。ハドリアヌス神殿を見 てから古代の公衆トイレにもしっかり座ってきた。昔の人は境のないトイレに 長時間座り込んで、隣りの人とどんな話をしていたのであろうか。

トイレの近くには娼館があり、大理石通りの石には十字と心臓と左足と女の 人の絵が刻まれ、これは娼館への案内図ということであった。十字は交差点を、 そして左側に娼館がありという意味という。イルファンは "VISA やマスターカ ードが使えますとは書いてありません"と冗談を飛ばしていた。

セルシウスの図書館は 2 階建てで体操立派であった。当時、アレキサンドリ ア、ペルガモンと並んで世界の3大図書館に数えられ、12万冊の蔵書を誇って いたという。その前でグループの集合写真を撮影した。







(図書館は2階建!) (劇場に腰掛けて古代を想像した)

(アルテミス神殿)

エフェソスの大劇場は2万4千人収容で、トルコでは最大規模とのこと。そ の観客席に腰掛けて前方のカルカディアン通りとその先を見ていると、かつて そこが大きな港であり、人々の活気に溢れた場所であったことが窺えるような 気持ちになった。

その後、世界の七不思議に数えられるアルテミス神殿を見学した。ただ歴史 に名を残したいという理由から火を放った男により、神殿は消滅してしまった という。復興されても他民族の侵入によって破壊され、その後は教会の石材等 に使われてしまったという。"だるまセブン"をやりたくなってしまうようなツ ギハギの柱 1 本が目立って、虚しさが漂っていた。どこが世界の七不思議なん だろうね。まぁとにかく、昔は、世界と言ってもギリシア・オリエント地方だ けだったとは思うけど・・・。

昼食後、革製品を製造販売している店に立ち寄った。初めに地元の若者(モ デル)によるファッションショーが行われ、次に加藤さん、山田さんらが指名 されてモデルに加わった。派手な皮のコートを着せられていたが、結構楽しそうであった。安くていいのがあれば、皮ジャンのハーフコートを購入してもいいなぁと思ったが、荷物にもなるのでやめにした。それにあまり安くないように思えたが、バブルを経験した日本人は"トルコの思い出に"と吹っかけられた値段で買わされてしまう人も多いのだろう。どうせ日本人観光客でもっているような店だと思うが、観光客がいないとき、ここの若者(モデル)たちは何をしているのか心配になってしまった。このようなところでは大した仕事も無いだろうし・・・。

早めに店を出て、ゆっくりと通り過ぎるロバに引かせた荷車を眺めていると、その脇をベンツと BMW が猛スピードで走り抜けていったが、この国の貧富の差が感じられる光景であった。

ここから再び長い時間バスに揺られパムッカレに向かったが、日没が迫り、 せめて明るいうちに石灰棚を見たいと思っていたので、気が焦ってしまった。 途中、イルファンの実家の前を通ったが、その少し前、この地区の家の屋根の 上に空ビンが載っていたら、未婚の女性がその家にいるという印という説明が あり、のどかで田舎っぽい感じがした。イルファンの家は3階建で、1階は小さ な雑貨商をやっているようであった。後でその中に足を踏み入れることになる とは夢にも思わなかった。また、家々には衛星放送のアンテナが立っていて、 この辺りのTV事情が窺われた。

TVといえば毎朝コーランをやっており、Dr なんとかとかいう人が代わる代わる登場して節を付けて謡っていた。イルファンに聞いたら、通常は木曜にやるのだが、今はラマダンの時期なので毎朝やっているとのことであった。

薄暗くなって来た頃に、ようやく石灰棚に到着した。靴下を脱いで棚田のお 湯の中に足を踏み入れると、思った以上にぬるかった。それに下がゴツゴツし ていて足の裏が痛くなり、ゴム草履が必要だと感じた。何とか頑張って一番奥 まで足を運ぶと、漸く温かなお湯を感じられるようになった。そこには水銀灯 が『ザ・ベストテン』の中継地のような感じで明るく灯されていた。空には満 月に少し足りない月が明るく光っているのが印象的であった。







(パムッカレという地名は'綿の城'という意味)

奥まで行ったために、戻るのに時間が掛かったが、途中、日本語版のガイド本を売る"1,000円、1,000円!"という声がうるさかった。急いで足を拭いて靴を履き、先に行った人を追いかけて温泉源に向かった。イルファンがポンプの作動に失敗したが、秋葉さんがうまくフォローし、温泉のお湯を飲むことができた。説明通り、しっかり炭酸の味がした。



【(秋葉さんが上手くポンプを開けてくれた−感謝!)

夕食後、20 時半にロビーに集合して"イルファンの実家ツアー"に出かけた。 15 名が参加した。階段を上って絨毯敷きの居間に通され、チャイとポップコーンをごちそうになった。次から次へと近隣から叔父やら姪やらが集まってきて、どれがイルファンの兄弟なのかも良く分からなくなってしまったが、温かい純朴な人々という印象であった。おみやげとして持参した"梅干"をイルファンのお父さんをはじめ親戚の方々に食してもらったが、かなり酸っぱかったらしく、二度と口にする人はいなかった!お父さんからはトマトソースのような味がするとのコメントをいただきました。

イルファンのお父さんは 65 歳で白い顎鬚のある優しそうな方で、メッカに 2 度も巡礼していることを誇らしげに語り、写真も見せてくれた。本当に楽しいティータイムとなり、このツアーの隠れたヒット(ホームランかな!?)であった。



(イルファンも寛いでいるよう)



(貫禄のあるお父さん)

イルファンのお父さんに年齢を尋ねた際、逆にあなたは何歳か?と聞かれて しまったが、最初にイルファンに年齢を聞いたときも同様であり、こちらの人 の習慣なのかなぁと感じた。

21 時半を廻ったのでホテルに戻り、明日の大移動に備えるために深い眠りについた。

12月31日(木) 曇り、晴れ

いよいよ 700km 近くを走破する大移動の日がやってきた。朝 3 時にモーニングコール! そして 4 時半にバスは出発した。

トルコの朝食には必ずヨーグルトが出されるが、これはトルコが原産とのことである。TVのCMの影響で、てっきりブルガリアだと思っていたので、ちょっと不思議な感じがしたが、イルファンは強く語っていた。

昨夜イルファンの実家を訪問した後、石塚君や山田さんらは、ホテルの温泉 プールに入り、とても気持ちが良かったそうだ。翌朝の起床が 3 時だっていう のに大した根性&体力だと思ったが、誘ってくれれば僕も入ったかもしれない (でも、海パンを持っていくのを忘れてたけど)。

未明の出発に、バスの中ではしばらく眠ってしまったたが、何とか 400km を 走ってコンヤに到着した。

コンヤは $11\sim13$ 世紀のセルジュク・トルコ時代の首都で、日本でいうと奈良とか鎌倉といった感じかなぁ。2 両編成の路面電車が走っていて、街の雰囲気からも古都が感じられた。バスを降りるととても寒かったが、町中の温度計が 2° あるときは 0° を示していた。

まずは2つの神学校を見学したが、セルジュク様式の青いタイルが印象的であった。その途中、"10個1,000円!"という掛け声でネックレスやブレスレットを売りに来たので、娘のおみやげに購入したが、帰国後とても喜ばれた。将に子供だましである。

コンヤはイスラム神秘主義の一派であるメヴラーナ教団が誕生した街である。 その縁の品々を展示するメヴラーナ博物館は、コーランの装飾本がとても美しく展示され、また、メヴラーナをはじめ彼の家族、聖職者等の美しい棺がたくさん並んでいて、ちょっと異様な感じもした。イスラムは土葬なので、棺の中に遺体がある訳では無く、棺の下に埋葬されているのだそうだ。メヴラーナは人格的に優れていたために信者が多かったそうだが、ここはメヴラーナの霊廟、僧院、修行場であったのが、1925年に教団が解散し、現在は博物館として公開されるようになったとのこと。



(棺とコーランが美しく装飾されていた)

メヴラーナ教とは踊る宗教だそうで、毎年12月の半ばにメヴラーナ祭が開催

されて、踊りが披露されるという。日本にも踊り念仏というのがあるが、神仏との一体感を求めるために踊ってしまうという感覚は、人間が本能の一部として持っているものなのかもしれない。この博物館に入場する際、女性はスカーフが必要ということであったが、外国人観光客の中にはスカーフをしていないグループもあって、結構いい加減なんだなと思った。

昼食はホテルのレストランで、バスでの心地よい午睡を求めて、魚屋(うお や)さんと二人でフルボトルの白ワイン空けてしまった。

爆睡から覚めると、バスはスルタンハヌのキャラバンサライに止まった。キャラバンサライとは。13世紀頃よりシルクロード沿いに造られた隊商宿で、盗賊に襲われないように、スルタンの命によって20~30kmごとに人やラクダが休める小城塞のように設けられた宿泊施設である。寒空の下、小学校に入るかそこらの女の子が物売り(おみやげ売り)をしていた姿がとても印象的だった。何も買ってあげなくてゴメンね。





(キャラバンサライの休憩は寒かった!)

バスの中で、イルファンが"トルコについて何か質問があればしてください"ということで、僕は徴兵制について聞いてみたが、とても厳しいという話であった。また歯科事情についても質問したが、彼の話から、トルコでは抜歯と入れ歯のイメージが強いことが窺われた。石塚君は吸血鬼ドラキュラは元々トルコの話だったと聞いたのですが・・・?と質問したが、彼の勘違いだったようだ。石塚君、それってもしかしてサンタクロースのことでは・・・・!? 山本さんが周囲の国との軍事関係について長々と質問したのでちょっと白けてしまい、イルファンも疲れてしまったようで可哀想であった。

"飛んでイスタンブール、光る砂漠でロール"という歌詞があるけど、イスタンブールの近くに砂漠ってあるのかなぁ、とイルファンに質問したかったが、彼も疲れてしまったようだし、聞きそびれてしまった。また、長い移動時間を利用して、トルコ語の挨拶(メルハバ、ナッスンスヌス、イーム等)やトルコの歌『ウシュクダラ』の教習を受けた。

観光もいよいよ佳境に入ってきた。コンヤから 250km 近くを走り、夕暮れ時 になって漸くカッパドギアに到着して、地下都市遺跡の見学となった。事前の トルコ旅行情報で指示された小型の懐中電灯を持っての観光が始まった。こんなところに!といった感じの地下5階の都市遺跡は、川口浩探検隊ではないが、ちょっとワクワクしながら巡った。

この地方にはローマ時代から多くのキリスト教徒が住み始め、信仰を基にした共同生活が営まれていた。イスラム教徒からの迫害を逃れる目的で地下都市を建設したということである。とても低い廊下をくぐったり、広々とした食堂があったり、倉庫や台所、空気を供給するための通気孔までも造られていて、内部は変化に富んでいて面白かった。当時、油は物凄く貴重だったと思うので、灯りの確保が大変だったと想像された。





(カイマクルの地下都市遺跡の内部)

カッパドギアのホテルは、地元のライオンズクラブの例会が行われるような 比較的立派なところであった。それにしても、この辺りの産業っていうのは、 やはり観光業だと思うけど、ライオンズクラブもあるんだなぁと、ちょっと不 思議な感じがした。

ホテルの食事はとてもデリシャスで、バイキング形式なので何回も料理を取りに行ってガツガツ食べてしまった。

食後は、ハマム体験をしようと、早々と秋葉さんと一緒に浴場へ向かった。 温かい大理石の上に横たわると、身体がじわじわ熱くなっていくのがわかった。 身体の裏表が温まったところで、千円のマッサージを受けようかと思ったとこ ろで、魚屋さんがとても混雑しているせいか、ちょっと背中をさする程度なの でやめた方がいいというので、素直に従った。サウナ効果で身体がすっかり温 まり、部屋に戻ってコーラとビールを飲んだが、と~っても美味かった!

年末カウントダウンのパーティに出て、新田さん(住職)に除夜の鐘代わり に何か叩いてもらおうかとも思ったが、長時間のバス移動の疲れと心地よいビ ールの酔いで気持ちが良くなってしまい眠ってしまった。

平成 11 年

1月1日(金) 快晴

新年おめでとうございます。5時45分にモーニングコール。毎日きびしい日

程が続く。昨夜は10時半ころにも眠ってしまったため、昨日の700kmの大移動・ 強行軍のわりに体調はバッチリであった。

将にブルースカイの下、風も無くおだやかな新年を迎えてのカッパドギア観光となった。この頃になって漸く新田さん(住職)の体調もやや回復してきたようで、バスを降りて観光できるようになった。





(キノコのような妖精の煙突と奇岩群)

エルジェス山の火山活動で堆積した溶岩や火山灰が長い年月をかけて侵食されてできたキノコのような奇岩群(妖精の煙突とも呼ばれる)は、見ていてとても楽しい気分になった。これらの奇岩群は現在も少しずつ変化して異なった形になり、また別の岩も現在進行形で奇岩を造作しつつあるということである。





(住職も元気になってきて、マスクをして観光に参加できるようになってきた)

ギョレメの洞窟教会ではストロボを使用し、監視員に怒られてしまったが、 専門家でない者の手によるフレスコ画はちょっと拙い感じがして身近なものに 感じられた。洞窟内の壁画は保存状態が概して悪く、今後は修復作業が大変だ ろうと思われた。10 個千円の大理石の彫刻(ゾウやラクダなどの動物を模った もの)を買ったが、バスの中で数えると 14 個もあり、こちらの買い物にも慣れ てきたのではないかと(図々しさに)自己満足した。

続いて訪れた絨毯工場では、トルコ人のあまりの日本語の流暢さに驚いてしまった。ここで購入した絨毯は、日本(新潟県柏崎)にあるトルコ文化村でアフターケアされるので安心であるという話であった。えーっ、オランダやスペインだけでなくトルコ村まであるのか!と驚いてしまったが、随分と寂しそうなところに造ったんだなぁと思い、観光客も少なそうだし、やっていけるのだ

ろうかと心配してしまった。それにしても、このように巧みな商売をされては、 つい買いたくなってしまうが、荷物になるし、船便で送るとなっても面倒くさ いので何も買わなかった。





(絨毯工場の見学と紺碧の空に映えるラクダ岩)

その後再び奇岩群を見て廻り、ラクダやナポレオンの帽子の形をした岩には、 ちょっと感動し、以前カナディアン・ロッキーで見たスヌーピー山を思い出し た。トルコの民族衣装を着た人形は、最初1個2千円と言われたが、2個千円に 値切っておみやげに加えた。

次にセラミック工場(KAYA CERAMIC HOUSE)に行き、皿の作製や絵付け等を見学した。地元の若い女の子が、日本人観光客のために元旦の朝から熱心に絵付けしている姿を見て、絵皿を買ってしまいました!オスマン・トルコ時代のスルタンか部族長が宴をしているものと狩りをしている光景が画かれた2枚である。







(美しい絵皿が飾られている部屋と、絵付けの光景)

昼食は洞窟レストランで、川魚の塩焼きという久々のあっさりメニューで嬉しかった。食事前に加藤さんに新年の挨拶と乾杯の音頭をとっていただき、全員で乾杯した。すると、室内の明かりが消えてミラーボールが輝き始め・・・。僕の誕生パーティが開催された。望月さん(添乗員)の粋な計らいで、ギターの形をしたチョコレートケーキも出され、皆さんのハッピーバースデイ・トゥ・ユーが終わるとろうそくを吹き消した。1月3日の誕生日を2日前倒ししての突然のイベントにちょっとビックリしたが、とても嬉しかった。僕は少しexpensive なシャンパンを2本オーダーして、皆さんへの御礼とした。







(洞窟レストランと誕生パーティ)

ホロ酔いの心地よさを引きずって、再び 300 kmのバスの旅が続いた。アナトリア高原をさらに東に進むと、メソポタミア文明を誕生させたチグリス、ユーフラテス川の源流があり、ノアの方舟が漂着したアララト (アール) 山がある。 方舟に関する資料館もあるというが、いつか訪れてみたいところだ。途中、左手にトゥズ湖(塩の湖)を実ながら、バスは進んでいった。

2 日前にイルファンが説明したトルコの名産地についてのクイズが車内で行われた。ブルサは桃、イズミールはぶどう、アマスヤはリンゴ、ディヤルバクルは西瓜、イスパルタはバラ、コンヤは小麦、カイセリはソーセージ、エディルネとワンはチーズ、オルドゥはヘーゼルナッツ、リゼはお茶(チャイ)、アフョンはお菓子、アンカラは山羊、デニズリは鶏、ゾングルダクは石炭、カフラマンはアイスクリームといった具合である。僕はリゼのお茶、ブルサの桃・・・短い地名しか覚えていなかった。バスの最前列に陣取って熱心にイルファンの話を聞いていた西さんが優勝した。おめでとう!

トゥズ湖に沈む夕日を、沈んだ後の残照までもゆったりと鑑賞すると、右手には月が美しく輝き始めた。満月に1日足りない14番目の月だった。"次の夜から欠ける満月より、14番目の月が一番好き♪~"





(ドライバー&イルファンとトゥズ湖に沈む夕日)

首都アンカラに到着したのはすっかり暗くなってからで、街中の雰囲気とか を感じることができず残念であった。アナトリア考古学博物館や、トルコ建国 の父アタチュルク縁のスポットも見てみたかった。

ドライバーさんとはアンカラの空港でお別れとなった。強行軍の長距離移動では、ちょっとお腹が出て頭の薄いドライバーさんがとても逞しく思えた。"テシュキュル・エデリム、アッラー・ウスマルラドゥック、ホシュチャカルン"と怪しげなトルコ語で挨拶すると、とても喜んでくれた。本当にお疲れ様でした。

20 時発のトルコ航空 145 便に搭乗し、一路イスタンブールへ。約 1 時間の短いフライトであったが、軽食(パンと飲み物)が出た。機内では血液型の話で盛り上がった。石塚君は O 型、そして野津さんと秋葉さんは絶対に B 型だと思ったが、その通りだった。パスポートを紛失したり(N)、海外旅行に腕時計もせず大きな目覚まし時計を持ってくる(A)なんて、B 型しかない!西さんの AB 型はちょっと難しかったが、賢明そうなところから納得できた。

イスタンブールに到着すると、その暖かいのにビックリしてしまった。待っていたバスに乗り込んで、ベリーダンスを鑑賞しながらのディナーショーに向かった。ベリーダンスは中々よかった。石塚君が以前エジプトで見たベリーダンスは踊り手がおばさんだったという話を聞いていたので心配したが、ここでは美人が出てきてホッとした、高橋さんから"あなた、鼻の下が長くなってる!"と言われてしまった。この踊りはおへそ付近の動きが激しく、何よりも便秘予防に役立つと思った。





(ベリーダンスは結構よかったです!)

その後は腹踊りとか、ナイフを使った民族舞踊、グレートシンガーのショー (ウシュクダラなどを歌った)が続いたが、もっといろいろな女性のベリーダ ンスが見たかった。パスポートの再発行に向かった野津さんはショーも見ずに 写真屋さん、警察等を廻ってわれわれの帰りかける頃に戻ってきた。

ホテルは初日と同じミム・ホテル。部屋には入れたものの、荷物の到着が遅くてイライライしてしまった。おまけに風呂には栓が無くて、シャワーを浴びただけでトルコ最後の夜を過ごした。バスに飛行機にと、新年早々慌しい 1 日であった。

1月2日(土) 曇り

いよいよ最終日になってしまった。われわれもそうだが、イルファンもかなり疲れているように感じられた。話の端々で、よく溜息をつくようになった。地下宮殿とボスフォラス海峡クルーズはオプションということで(7千円追加)、別行動をとった3名以外は、一緒にオプショナルツアーを巡ることになった(僕も面倒臭くなって従った)。

開館時間前に到着してしまって少し待たされたが、まずは地下宮殿の見学から始まった。ここは戦争時に水に困らないよう、貯水槽としてローマ帝国時代の6世紀に建設されたという。『007ロシアより愛をこめて』の撮影に使用されたことでも有名だが、ちょっと神秘的でロケ地にふさわしいと思われた。イルファンは、映画ではここからすぐにグランド・バザールに出てしまうので"あれはおかしいです!"と笑っていた。有名なメドゥーサの首はひとつは下を、もうひとつは右下を向いていた。







(007のロケ地である地下宮殿は、ちょっと神秘的でした)

地下宮殿を出るとアヤソフィアはすぐだった。ここは世界で 4 番目の大きさを誇る教会 (として建てられたもの) である。1番はバチカンのサンピエトロ聖堂、2番はミラノのドゥオモ、3番はロンドンのセントポール大聖堂なのだそうである。僕は1~4番を制したことになり嬉しかった。アヤソフィアはとは神の知恵を意味し、325年コンスタンティヌス 2世によってギリシア正教の総本山として建てられたとされる。その後焼失、破壊、再建が繰り返され、オスマン・トルコ時代になるとミナレット(尖塔)が付け加えられて、イスラム教のモスクとして生まれ変わったとのこと。

偶像崇拝を禁止するイスラム教徒により、内部のモザイクやフレスコ画はすべて漆喰で固められてしまったが、そのことが却ってそれらの保護になって現在甦っているのだそうだ。500年もの間漆喰で塗りつぶされていたなんて、気の遠くなる話である。内部は修復中で、ちょっと興ざめしたが、さすがにイスタンブールを代表する建物だけのことはあって重厚感に圧倒された。キリストやマリアのモザイクやアッラーを示すアラビア語で書かれた円盤等、モスクと教会が一体となった不思議な空間が存在していた。2階のギャラリーにもたくさんのモザイク画があったが、下部の方は観光客によって剥がされていた。せっか

くの遺産も観光マナーが悪いと台無しになってしまうので、注意が必要である。







(アヤソフィアの外観と少し暗い内部)

ボスフォラス海峡クルーズは貸切船で快く、海上から見るイスタンブール市街、特にスレイマニエ・ジャミイはとても美しく映えていた。第1ボスフォラス大橋を過ぎる頃まではよかったが、だんだん冷えてきたのでキャビンでチャイを飲んでウダウダ過ごした。少し暖まってから再びデッキに行くと、"鹿島さ~ん、この辺りはイスタンブールの別荘地です。トルコに一つ如何ですか~!?"とイルファンからマイクを通してからかわれてしまった。第2ボスフォラス大橋の手前で船は \mathbf{U} ターンしたが、もう少し進むと黒海に出るんだなぁ、行ってみたいなぁ、と思った。天候が曇りと、今いちだったのが残念であった。





(ボスフォラス海峡クルーズ-秋葉さんと)

クルーズ終了後、ちょう度バスの横に旗を売っている店が出ていたが、石塚君がトルコの国旗を物色していた。その光景を見て、イルファンが国旗の隣りにあるのが彼の好きなサッカーチームの旗であると話し出した。サッカーといえばトルコで最も人気があり、次いでバスケットボール、野球は全くダメとのことであった。そういえばイルファンはジーコに似ていることを話すと、良く言われると喜んでいた。そこで、ジーコも在籍した鹿島アントラーズのボールペン(たまたまもっていた)を、日本で一番強いサッカーチームのものといって、イルファンに謹呈した。

ホテルのある新市街から旧市街へはガラタ橋を渡るが、この橋ではたくさんの人が釣りをしていた。カタクチイワシや鯖が釣れるらしい。名物の鯖のサンドイッチも食べてみたかったなぁ。

その後バスはイスティクラル通りに向かった。イスタンブールの高級ショッピングスポットを、イルファンの後について巡った。自由時間には秋葉さんとともに念願のドネル・ケバブを買いに行った。肉の焼ける匂いが食欲をそそり、並んで待っている間がとても長く感じた。トルコの絵皿等のおみやげを購入してからバスに戻ってドネル・ケバブを食べていると、新田さんがパンでなくタコス風のドネル・ケバブを買ってきてごちそうしてくれたが、タコス風の方がだんぜん美味しかった。ごちそう様でした。やっと名物料理を食べたという感じで大満足であった。

いよいよトルコ旅行も終焉を迎えた。途中、スイスホテルで別行動をとった 人たちと合流して空港へと向かった。

昨夜、ドライバーさんに言った言葉を、今回はイルファンに告げたが、とても切なく寂しくなってしまった。いろいろ良くしてくれてありがとう。名ガイドありがとう。実家に連れて行ってくれて、本当にどうもありがとう。"テシュキュル・エデリム、アッラー・ウスマルラドゥック、ホシュチャカルン!"『ウシュクダラ』は一生忘れないぞ!



(イルファンとのお別れはとても寂しかった)

イスタンブールの空港では少し時間があったので、ラクとチャイ等のおみやげを買った。ドイツ人観光客が多いのか、おみやげにはしっかりドイツ語の標示とドイツマルクの値段が記載されていた。

イスタンブールからウィーンまではオーストラリア航空で 2 時間半あまり。 そこから再び同航空でドイツのフランクフルトに飛んだ。フランクフルト空港 はもの凄く広くて、自転車で移動している職員がいたのにはビックリした。

JAL408 便に搭乗して成田に向かったが、各々のフライトで食事が出されたので、1日6食となってしまった。JALの機内食は久々の日本食(親子丼とそば)でとても嬉しかった。ビデオで『アルマゲドン』を観たが、途中ウトウトしてしまったので今いちのようであった。でもブルース・ウィルスは『ダイ・ハード』の印象が強烈である。

成田では流れ解散になった。アッという間にバラバラになってしまい寂しかったが、ツアーの打ち上げパーティで再会できることを楽しみにしています。 それまで皆さん、お元気で!





(いろいろ大変だったけど、何とか無事に帰ってきました!!)

あとがき

旅とは「出会い」である、とよく言われる。今回の旅行は大変ハードであり、 体調を崩される方も何名か出てしまったが、そのことでメンバーの結束力が強 まってたくさんの友情が芽生えたが、大きな出会いと言えよう。今回知り合っ た"旅友"とは今後とも長い付き合いになるような気がしている。

「旅行とは、異なった時代の人々と会話をするようなものだ」とかのデカルトは言ったが、今回のツアーでは、トロイをはじめペルガモンやエフェソス等のすばらしい遺跡群を巡り、そこここで古代の人々との会話を楽しめたような気がする。感動的な歴史との出会いと言える。また、エーゲ海沿岸地方の素朴な風景や羊の放牧、抜けるような青空とのコントラストが美しいカッパドギアの景観といった素晴らしい自然との出会いもあった。そして、それらの中で大気の肌触りを実感した新たな'おのれ自身'にも出会うことができた。

一方、旅は「名残」が感動である、とも言われる。一見行動そのものが旅のように思えるが、実は旅とは時間感覚でとらえる行為であり、心情の面では、常に「終わっていくもの」への惜別を伴っていると言えよう。今回は、いつにも増して「名残」を強く感じている。それは光が強ければ強いほど、その後の残像が大きいといったことに例えられるかと思う。皆さんどうもありがとうございました。



(帰国1ヶ月後、都内のトルコ料理店で打ち上げパーティーを行いました)